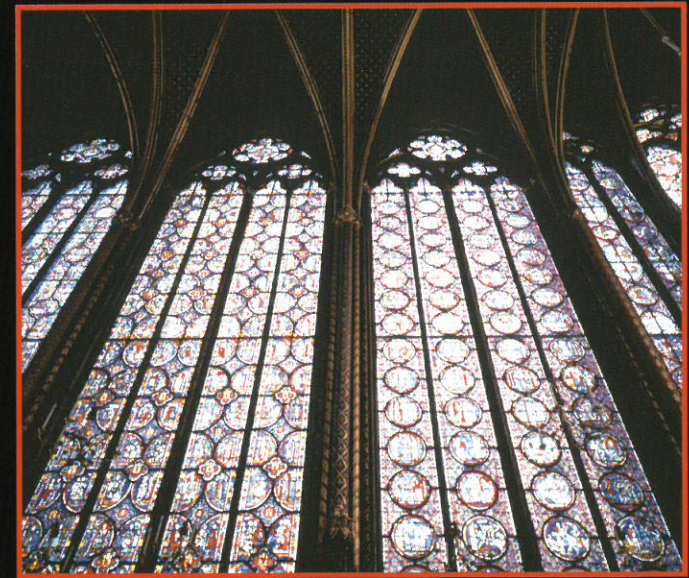


アダージョ楽章写譜:オーストリア国立図書館音楽部門(ウィーン)のご好意による掲載、
資料請求番号:Mus.Hs.34.614から
By courtesy of die Musiksammlung der Österreichischen Nationalbibliothek.



TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団

第37回定期演奏会

2004年9月4日(土) 18:30開演(開場18:00)

東京芸術劇場大ホール

TOKYO METROPOLITAN ART SPACE

主催:東京ニューシティ管弦楽団

ブルックナー自身による改作版(1.5版) / アダージョ楽章 世界初演

Anton Bruckner

PROGRAM

ブルックナー (1824~1896)
Anton Bruckner

交響曲第8番ハ短調 Symphony No.8 in C minor

I Allegro moderato

II Scherzo. Allegro moderato-Trio.Langsam

III Adagio. Feierlich langsam;
doch nicht schleppend

Dermot Gault氏と川崎高伸氏編集による楽譜使用
Edited by Dermot Gault & Takanobu Kawasaki

IV Finale. Feierlich, nicht schnell

I,II,IV楽章はノヴァーク版第2稿使用

初演アダージョの聴きどころ

川崎 高伸

ここにおいでのお客様の多くの方は、今晚世界初演されるブルックナーの「第八交響曲」のアダージョが、どんなに変わったものだろうかと興味をお持ちでしょう。ここでは普段聴かれるこの曲のアダージョと、どういった点が違うのか少しお話ししましょう。まあ、推理小説のタネ明かしたいなことになりますので先入観なく聴こうと思っていらっしゃる方は、以後は演奏後にお読みください。

「第八交響曲」は、これまで第1稿と第2稿という2つの全曲が完成された形で知られてきました。今晚のアダージョは、これらとは違うものなので、ノヴァークの「第三交響曲」アダージョ異稿における対応と同様に、第1稿のアダージョを『アダージョ1』、第2稿のアダージョを『アダージョ3』、そして今回のものを『アダージョ2』と呼ぶことにしましょう。

まずお断りしておかなければならないのは、実は初めの方はそんなに違いはないのです。始まって3分の2程度は第1稿『アダージョ1』、第2稿『アダージョ3』のどちらかと同じように進みます。もちろんそれらの中でも微細な相違、楽譜編集上の問題点は山積みしているのですが、音楽そのものは3つのアダージョともほぼ同じようなものなのです。しかし、細かい点を見れば興味深い相違があちこちに散在しています。最初にこの稿の特徴がはっきりわかるのは、高弦の刻みに乗って美しく飛翔するチェロの副主題登場への橋渡しのパッセージです。第1稿ではハーブを伴った弦の合奏が全く静寂の中に消え去った後、あらためてホルンがチェロの副主題に基づくほんの一節を入れるのですが、『アダージョ2』では弦の合奏の最後の方でひそやかに加わったホルンが、弦合奏が終わったあともそのまま鳴り響き、それが単純に音階的下降しながらチェロのメロディーに繋がっているのです。『アダージョ3』では、この下降音形が副主題の一部から採られたような感じのより印象的な動きに変わっています。

さて、問題は主要主題が3回目に表れ大きくクライマックスを形成する部分です。その途中で、ハースが第1稿から第2稿に取り入れたとしてよく話題になる10小節の挿入部分がありますが、この『アダージョ2』では不思議なことに、それは前半の6小節だけが残されています。ブルックナーは2段階に分けてこの部分を削除していったというわけです。この10小節は、前半は膨らみ、後半はしぼんでいくように作られているのですが、この稿では後半をカットしたおかげで大きく盛り上がった流れの中で、そのまま次のフォルテッシモへ突入することになりました。

この楽章の改訂の最も重要な目的は、このクライマックスをハ長調から変ホ長調へ移すことでした。これは、第1楽章のコーダ後半のカットと並んで、交響曲の頂点であるべきハ長調のクライマックスをフィナーレの最後の一点に集中させようという、作品の全体構想の変更に基づく大手術でした。第1楽章では、そのクライマックスをブルックナーはあっさり切っ捨てたのですが、アダージョでは、このクライマックスに向かう高揚部分をブルックナーは苦勞して再三書き直したのです。第1稿『アダージョ1』では、2度にわたってテンポを引き締め、加速したあと、クライマックスの直前で急激に手綱を緩め、インテンポのクライマックスに突入するという、ちょうどフルトヴェングラーがやりそうな劇的なテンポ設計で作られていましたが、この『アダージョ2』では、あくまでもインテンポを守り、執拗に同じ音形を繰り返しながら高揚するという、いわゆる『ブルックナークレッシェンド』といわれるものに変えられました。音楽は、突然峠の上に立ったような衝撃的なホルンの四重奏(フォルテッシモ)に移り、さらにヴァーグナー・チューバのファンファーレを伴いながらクライマックスに突入するのです。この部分が『アダージョ2』の最大の聴き所といえるでしょう。クライマックスにおいても6連符は執拗に維持され、この部分でさえ正確なインテンポが示唆されています。ある意味、このテンポの融通のなさが再度の徹底改訂の原因になったのかもしれない。その辺のところ今日の演奏で皆さんはどのような印象を持たれるでしょうか。

クライマックス後の、『アダージョ3』ではカットされた〈ヴァーグナーを追慕する〉部分は『アダージョ2』ではそのまま残され、より意味深く改良されました。この部分の最後に奏される寂寥感に満ちた短いオーボエソロは是非お聴き逃しのないようにと思います。

本日の演奏は、ウィーンのオーストリア国立図書館に収蔵されている、この『アダージョ2』の筆写譜(Mus.Hs.34.614)を英国在住のデルモット・ゴルト氏と私が共同で編集したスコアによっています。

音楽評論家 浅岡 弘和

「今回初演されるアダージョ異稿発見への経緯について」

ブルックナー大国といわれる我が国だが、ブルックナー交響曲の世界初演が初めてこの日本で行われ、さらに発見者から演奏者までが全員日本人とは!

しかもこれはアダージョのみとはいえブルックナーの最高傑作、交響曲第8番の別バージョンの初演なのである。これを快挙といわずしてなんといおう。正に日本ブルックナー演奏史上空前絶後の大事件といえるだろう。

そして発見者である大阪在住のブルックナー研究者川崎高伸氏といえは、今はなき日本ブルックナー協会の全盛時、協会報に詳細な研究を発表する等大活躍され、会長でもあったあの巨匠朝比奈隆氏に例会の席上「川崎さんの御説の通りに楽譜を直したら響きが違う」といわせしめたことも知る人ぞ知るエピソードである。

その川崎氏が1999年夏に渡欧、オーストリア国立図書館所蔵のブルックナー関係資料を調査した際、何とその中からブルックナーの交響曲第8番のもう一種類のアダージョを発見された……

既に「音楽現代」1999年11月号と2000年7月号には川崎氏御自身による論文「ブルックナー『第8交響曲』アダージョの楽譜を探る」が2回に渡って掲載されているが、2000年夏にはエレクトーンによるヴァーチャルオーケストラによって演奏され、併せてCD化もされ、ブルックナーファンの中に大きな反響を巻き起こしたことは記憶に新しい。

そして今夜、内藤彰指揮東京ニューシティ管によって、ようやく本物のオーケストラによる世界初演ということに相成ったわけだが、おそらくブルックナー交響曲の(楽章単位での)世界初演もこれが最後になると思われる。20世紀中に「化石」もあらかた掘り尽くされてしまい、21世紀にたった一つだけ残った「失われた環」が今夜初演されるアダージョなのである。

川崎氏が実は市井の郵便局員であることを考え合わせると今回の発見は昭和新山を独自に考案した方法で観測した三松正夫氏の観測資料がオスロ万国火山会議で「ミマツダイヤグラム」と命名され絶賛を博したことに比することもできるかもしれない。

御他分に漏れず今回の発見も「実は自分が先に……」と語っている御仁がいると仄聞するが、このアダージョ、最初のうちは既知の二つのアダージョとほとんど変わらないので、たとえ資料を借り出してもボーッと見ているだけでは違いに気がつかなかったであろう。ニュートンのリングではないが、発見とはただ見ているのではなく「認識」なのである。

曲目解説

周知のようにブルックナーの交響曲の演奏には錯綜を極める版の問題が付きまとい、交響曲第8番の場合もハース版、ノヴァーク版という二つの原典版が存在し、ノヴァーク版自体が第1稿(1887年稿)と第2稿(1890年稿)という二つの形で出版されている。今夜はアダージョのみ今回世界初演される川崎版、他の三つの楽章はノヴァーク版第2稿(1890年稿)が使用される。

ブルックナーの交響曲の演奏ではワーグナー同様、造型にテンポやダイナミクス以上に「響」が優先される。彼の交響曲は文字通り、交「響」曲なのである。或いは時間芸術というよりは空

間芸術なのかもしれない。「響きあれ」ブルックナーの音楽の本質はメロディーなどでは決してなく響きそのものなのである。

ブルックナーは「自力」の音楽では決してない。ベートーヴェンのように神の許へ自分が行くのではない。神を待ち望む、神を呼ばれる「他力」の音楽なのである。しかし両者共、神を痛切に求めるといふ点では全く変わりはない。

〔第1楽章〕 第1主題はベートーヴェン「第9」と同じリズム型を持つが、彼自身の「第3」や「第9」と違って、ベートーヴェンと同工の巨大な落下する超人的な第1主題提示は持たない。そのせいか筆者はブルックナーの交響曲の第1楽章の中では特に魅力的なものとは考えていなかったのだが、最近考えを改めた。いやそれどころか、最近筆者はブルックナーの音楽というこの楽章の展開部後半、無碍の祈りのような199小節以降が頭の中に鳴り響くことが一番多いのである。ゼクエンツによる典型的なブルックナー・クレッシェンド、ブルックナー・リズムの饗宴。ここはいうなれば「念仏クレッシェンド」であり、この神を呼ばれる「力ない」他力の祈りには絶対にアッチェランドをかけてはならない。ブルックナーは振るべからず、何者かに召還されるような音楽に対する絶対的な受け身の姿勢が肝要なのである。この部分、ヴァントやチェリビダッケの最晩年の演奏では極度に遅いテンポによりトランペット、ティンパニの鋭いリズムと下降するブルックナーリズムの凄まじい対立が聴ける。

特に第1主題の拡大された再現である225～249小節にかけて、極大化されたブルックナー・リズムと第1主題の立体感がアルプスの白き荘厳な峰々の威容を想わせ、手法こそ正反対だがベートーヴェン「第九」の第1楽章第1主題の圧倒的な再現に優に匹敵する。ここはもはや真にブルックナー的な他力の音楽といえるだろう。ブルックナーもこの曲のフィナーレや「第九」ではベートーヴェンに戻ってしまったところが多いが、マーラーのように安直なオーケストレーションでシンバルやハンマーをいくらブツ叩いても、こういう宇宙的なスケールの大きさ、迫力は絶対に出まい。〔第2楽章〕 ブルックナー自身がドイツのミヒャエル(一刻者)と呼んだ自画像的な主題による大規模なスケルツォ。昔クナッパーツブッシュのライナーでミヒャエルをミカエルと勘違いしたのか、大天使と誤訳しているのを讀んだことがあるが、いかにブルックナーといえども国王くらいならともかく自分を大天使にはなぞらえまい。なおブルックナーもこの曲からベートーヴェン「第9」に倣い、スケルツォを第2楽章に置くようになった。

〔第3楽章〕 詳細は川崎氏の解説参照。天国的なコーダは出だし以外ほとんど変わらない。

〔第4楽章〕 ベートーヴェンの「第9」が全人類を神の許へ送り届けて終わる(上昇)のなら、コサックの行進で始まるこの楽章は神の軍隊の「御来迎」で終わる(下降)。だが、クライマックスは何といってもコーダ直前の第1楽章主要主題の再現だろう。ブルックナー独特の浮かぶのではなく沈むクレッシェンド。彼は神を呼んでいる。しかし……「絶望の究極に神は不在として現われる」来迎・不来迎は常に宗教的大問題なのであるが「第9」が遂に未完に終わったのもコーダをどうするか結論が出なかった事が大きいと思われる。「第7」フィナーレのシンメトリックソナタがいい例だが、この楽章も第2主題などに十字架象徴が多用されている。最後は四つの楽章の主題が全て積み重ねられ十字を切るようなトランペットの特徴的な動きといふ巨大な十字架が屹立し一切が崩壊するように終結する。

Profile

指揮 内藤 彰

AKIRA NAITO (Conductor)

名古屋大学理学部卒業。在学中より指揮を山田一雄氏に師事する。桐朋学園大学研究科(指揮専攻)にて、小澤征爾氏、秋山和慶氏、尾高忠明氏他に師事し、修了後(社)山形交響楽団の専属指揮者を3年間務める。

これまでに新日本フィル、東フィル、東響、新星日響、シティ・フィル、神奈川フィル、名フィル、九響他、日本の多くの主要オーケストラを指揮してきた。シンフォニーはもちろん、オペラ・バレエの分野でも、その音楽性とテクニックは聴衆の心からの共感と、共演者の絶大なる信頼を得ている。

海外では、'91年旧ユーゴスラヴィア国立ベオグラードフィルハーモニー、'92年モスクワ交響楽団を指揮。'96年5月、ロシアの国立ヴァローニッシュ歌劇場にて、『セヴィリアの理髪師』を、'97年5月には、ベラルーシ国立歌劇場にて『蝶々夫人』を指揮し、その成功により、同歌劇場から定期的な客演が要請されている。また'01年3月のサンクトペテルブルグ・カペラ交響楽団、'02年5月ロシア国立ウリヤノフスク・アカデミー交響楽団に客演。'01年12月には北ハンガリー交響楽団を、'02年7月にはミラノスカラ座フィルハーモニーのメンバーを中心とする州立ロンバルディア室内管弦楽団の北イタリアツアーを、'03年3月にはメキシコ州立交響楽団を指揮。

'04年1月に行なわれた歌劇『蝶々夫人』の公演にて、作曲家プッチーニの強い願いにもかかわらず初演以来一度も使われてこなかった、本来決まった音程を持たない日本の伝統的「かね類」(寺の釣鐘の音、寺で僧侶が経を読みながら叩く大きなお椀型のキン、風鈴他)に、12音の音程を持たせ「楽器」として特注創作、それにより作曲者の願う本当の『蝶々夫人』を世界初演し、各方面から驚きと絶大なる賛辞を得た。今まで知られていなかったプッチーニの大切な意図の数々が初めて明らかにされるなど、日本人の指揮者として、世界のオペラ界への貢献はきわめて大きい。

'04年7月イタリアのプッチーニフェスティバルでは、この鐘が使用され地元の新聞、テレビに大きく取り上げられた。これを機会に、正しい『蝶々夫人』の演奏は世界中に広く普及していくであろう。

現在、東京ニューシティ管弦楽団、及びプロ混声合唱団「東京合唱協会」音楽監督・常任指揮者、日本指揮者協会幹事。



©堀田 正祐

東京ニューシティ管弦楽団

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団は、1990年、音楽監督・常任指揮者に内藤彰を擁し設立された。定期演奏会の他、名曲コンサート、オペラ・バレエとの共演、音楽鑑賞教室、レコーディングなど幅広く活躍。

定期演奏会は、現在年5回行なわれ、内外の実力のあるアーティストを迎えている他、定例的に行なっているプロ混声合唱団・東京合唱協会とのジョイントでは宗教曲、オペラハイライト等毎回意欲的な内容を披露し、その高い完成度は注目を集めている。また現在、日本で初のブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスを継続中である。

オペラの分野では特に評価が高く、二期会、藤原歌劇団のオペラ公演の他、レナター・スコット、アルフレード・クラウス、ヘルマン・ブライ、ルチアーノ・パヴァロッティ、カルロ・ベルゴンツィ、ファン・ディエゴ・フローレス、アグネス・バルツァ等世界で活躍するオペラ歌手との共演も数多く、聴衆や批評家のみならず、世界の著名オーケストラと共演している彼らからも、心からの絶賛の言葉を贈られている。

バレエの分野では、国内の主要バレエ団の他、英国バーミンガム・ロイヤルバレエ団、ミラノスカラ座バレエ団、シュトゥットガルトバレエ団、モンテ・カルロバレエ団、ロシア国立レニングラードバレエ団等海外からのバレエ団の日本公演にもこれまで数多く出演し、公演をサポート

する誠実で質の高い演奏が毎回非常に高い信頼と評価を得ている。また、桂三枝、三枝成彰、中島啓江、ケント・ギルバート、マリ・クリスティーン等を迎えてのファミリーコンサートも、大変評判がよく、多くの方々から親しまれている。

最近では、さだまさしのコンサートツアーに共演し、出演者、観客ともに絶賛を浴び成功をおさめた。

Members

東京ニューシティ管弦楽団

音楽監督・常任指揮者

内藤 彰

指揮者

平井 秀明

マネージング・ディレクター

渡部 中子

コンサートマスター

藤田 めぐみ

アシスタントコンサートマスター

鈴木 順子

インスペクター

山川 奈緒子

ライブラリアン

古市 尚子

事務局

青木 勝弘、今井久美子、渋谷 明子、鈴木 光子、渡辺 晶子

1st Violins	荒巻 泉	望月 直哉	丸田 悠太	源 真理
○藤田 めぐみ	高階 久美子	富成 倫子	Oboes	松田 俊太郎
鈴木 順子	小林 清美	多湖 あかね	徳田 振作	上久保 奈津子
富山 ゆりえ	越智 久美子	中田 英一郎	井上 恵子	Trumpets
中澤 真理子	栗原 りか	星野 敦	池田 祐子	中西 清一
中村 朱見	妙見 麻紀子	高山 祐子	Clarinets	小林 史尚
山川 奈緒子	老田 美郁	山崎 明子	西尾 郁子	小曲 俊之
上田 博司	Violas	Double Basses	畑中 真理	Trombones
浅井 万水美	○桜井 多美子	○渡辺 哲郎	小山 裕子	大川 真紀夫
野沢 健太郎	竹鼻 江美子	青山 幸成	Bassoons	伊藤 吉隆
徳井 えま	安達 いづみ	飯田 克哲	藤田 旬	石原 左近
大竹 奏	久郷 寿実子	中村 勇一	齋藤 美和子	Tuba
笹井 飛鳥	堀江 冬子	石川 仁	榎本 真理	松下 晃一
小林 冴子	尾台 和佳	鷲見 精一	Horns	Timpani
榎本 さとみ	松田 美奈子	Harps	小川 正毅	藤城 佳之
2nd Violins	高瀬 有美	平山 菜津子	月原 義行	Percussion
○上原 まさみ	田中 智子	木村 彩	松浦 光男	石澤 学
山江 洋子	Violoncellos	Flutes	小林 祐治	尾花 章子
山本 佳子	○齋藤 章一	井ノ上 洋	飯島 さゆり	Stage manager
岡田 邦子	大島 純	名越 篤	小笠原 一弘	青木 勝弘

東京ニューシティ管弦楽団2004年定期演奏会

音楽監督・常任指揮者 内藤 彰

■第38回定期演奏会<ベートーヴェン新版シリーズVI> ~カナダと日本:75周年~
2004年12月3日(金) 19:00~ すみだトリフォニーホール(大)

指揮:アグネス・グロスマン

共演:トリオ オシュラガ/ヴァイオリン:アンヌ・ロベール/チェロ:ブノワ・ロワゼール/ピアノ:ステファン・ルムラン
ベートーヴェン:「フィデリオ」序曲:ピアノ・ヴァイオリン・チェロのための三重協奏曲:交響曲第7番(ブライトコップ新版)

お問い合わせ
お申し込み

東京ニューシティ管弦楽団事務局
Tel:03-5933-3222

〒178-0063 東京都練馬区東大泉3-22-15-2F
Fax:03-6766-3782
http://www2.plala.or.jp/newcity/

- 団体割引・セット券割引については事務局にお問い合わせください。
- やむを得ぬ事情により、出演者、曲目等が変更になる場合がございます。何卒ご了承ください。